



インドからの便り

JICA協力隊 2019年1次隊

氏名：西澤 ひかり 職種：障害児・者支援

2020年8月17日 第3号



ワナッカム！（タミル語でこんにちは）2019年1次隊としてインドのチェンナイに派遣されていました、西澤ひかりといます。現在は新型コロナウイルスの影響で帰国をしていますが、2019年7月～2020年3月までおよそ8か月間、障害児・者支援の職種で活動していました。本来の任期の半分も現地にはいられていませんでしたが、8か月で私が行った活動や、任地の様子をお伝えしたいと思います。

NIEPMD での活動について

私の配属先 NIEPMD(National Institute for Empowerment of Persons with Multiple Disabilities)は重複障がい者のための国立研究所です。様々な専門部署がある中で、私はスペシャルエデュケーション（特別支援教育）の部門に所属しました。



スペシャルエデュケーション課の中にはさらに3つの部門があります。

- | | |
|-----------------------------------|-------------------|
| ① Special School (Model School) | 付属特別支援学校（モデルスクール） |
| ② HRD (Human Resource Department) | 人材育成課 |
| ③ Special Education Services | 特別支援教育サービス |



私は普段は③の特別支援教育サービスに所属していました。サービスには、付属特別支援学校に通っている子ども以外の学齢期の子ども（外部の普通小中学生、特別支援学校生、職業訓練校生、卒業生（18歳以下）、未就学児等）が通って来て1回40分くらいその子どもに合わせた学習をします。毎日来る子どももいれば週1の子、遠方のため一定期間近くに留まってまとめてサービスを受ける子など様々です。その子どもの課題に沿った課題を先生たちが個別に教えます。



ここにはないもの、必要なものは何だろう？そしてどうやって伝えたらいいだろう？

2号と3号でお伝えしているように、NIEPMD はとても大きな施設で、すでにシステムが確立し、日々動いています。そんな中に突然やってきた私ですので、いろいろ違和感を覚えるところはありましたが、簡単にこの土地のやり方を批判したり、変えるべきだと言ったりしていいものかと派遣当初は悩みました。そんな私が最初に行ったのは教材の提案です。見学する中で、支援が行き詰ってるな～とかもっと効果的に教えられないかな～と思った指導に、「こうすればいいよ！」と私（日本）のやり方を押し付けるのではなく、「こんなの作って見たけどどうかな？」といった感じで「提案」をすることで、使えるか使えないかの判断は現地のインド人の先生に任せようと思ったからです。

例えば…



時計の学習の教材。時計の学習をするのに、ノートに先生がフリーハンドで描いた図の時計の時刻を読み取って書くという方法で行っているのを見て、絶対に実物や模型を使った方が分かりやすいと思い作りました。シンプルなものと、0時0分まで細かく読み取れるものをさらに色を塗って分かりやすくしました。この2つと実物の時計を段階に応じてステップアップしながら学習できるようにしました。



手指機能の向上のための教材。シンプルな木のクリップですが、子どもたちがどこに指を置いて、力を入れると開くのかなかなか掴めずにいたのでニコニコマークの目立つシールを貼ってみました。これにより持つ部分が分かり、指に力を入れ、クリップを開いて留めたり外したりができるようになった子もいました。



身体にまひがある子どもに対し、教師や親が補助をして（子どもの手を大人が持って動かして）活動することがとても多いと感じました。まひがあっても、その子のもっている力を使って、大人の助けを借りなくても「やってみたい!」「(目的のために) がんばろう!」「できた! うれしい!」という思いを味わってほしいと思い、ざるを使ってくす玉を作りました。くす玉自体がインドではポピュラーではなかったですが、一度やって見せると大人も子どもも興味をもってくれ、ひもを引くと飛び出すメッセージや飾りを楽しみながら学習ができました。